

民族と宗教との社會的連關の一考察

稻岡順雄

第一次大戰後の民族自決の時代、即ち民族の政治的自治の要求時代と比較して、少くとも今次大戰後には民族の問題は表面的には世界の舞台からその姿を消したごとく見られる。又一部の人々は民族を語るべきでなくして、むしろ今こそ、世界を語るべきだと強調する。併し民族を抽象した世界と云ふべきものが考へられない如く、世界は常に民族から形成され民族を通して、世界が構成されてゐる。個人を抽象し去つたところに社會はないであらう。諸個人が相互に關係し合ふところに社會がある。と同様に世界もまた、諸民族間の相互關係から成り立つてゐるのである。現今世界はイデオロギーの戦ひ、階級戦の時代の觀を呈してゐる。然しその中にも決して民族の胎動は終熄してゐない。否むしろ階級の線にかくれて、或は階級の線を突破して、民族それ自躰の生命を戦ひとつて來てゐる。現に今我々は階級が世界を動かしてゐる事を率直に認めなければならぬ。併しその背後には、常に又民族の力が潜んでゐるのを見逃してはならない。

然らば一体我々は民族と云ふものを如何に規定すべきであらう。從來から民族を説明するのに二つの立場があつた。第一は所謂主觀的立場であり、他は客觀的のそれである。前者によれば、民族とは民族をなすとの意識即ちその民族の擴充を求めようとする、共同意志によつて結果せられる集團である。民族が共通の過去を有し、その豊かなる歴史の中

において、共同の誇りと屈辱と歡喜と悲哀を感じ、そこに生れた意志と希望とを實現せんとする集團として把握される。併し又かゝる精神的協同が齎らされる條件として、民族は血や言語や生業や慣習や社會組織や宗教の共通と云ふ客觀的要素を持つてゐる。この主客兩面は相表裏して存在するものであるから、民族の本質は兩側面から考察されねばならない。然し民族理解の方法としては兩者の間には、かなり明確な對照が現はれてゐる。民族研究の焦点は主としてこの客觀面に向けられてゐる。

その客觀的要素としてまづ第一に血の共同即ち血縁共同体 (Blutsgemeinschaft) としての民族概念である。人は屢々近代自然科学的概念としての、人種決定論 (Rassendeternismus) を想起するであらう。白色人種のみを文化創造者として最強且最美と自讃し、血、ひいては皮膚の黒白によつて頭腦、精神にまで高下の別ある事を主張せんとする獨斷にすぎない論であるにしても、我々は民族を規定する第一の契機として血を擧げる事に異議をはさまないであらう。併し如何なる民族においても單一の純粹な少しの混血をも含まぬ血のみによりて形成されてゐないと云ふ事實によつて、單に血のみの共同体としては民族は完全に規定されない。

次には血に對して地即ち地縁共同体 (Stedlungsgemeinschaft) として民族を規定せんとする企てがある。民族の團結の成立する血には久しきに亘つて居住地域の共同であつた事が重要な一つの紐帶を形成してゐる。併し現在一たび民族の成立してゐる場合、地縁の共同を排除して尙且一つの民族を形成してゐる例を列記するにさして困難を感じない。

以上血と土との共同は少くとも民族形成の客觀的なる二大要素として指摘する事に何人も反對せないのであらう。併し之のみでは決して充分なる契機ではあり得ない。以上二つの要素と共に屢々提出されるのは、運命共同体 (Schicksalsgemeinschaft) のそれである。之は前二者と異り單なる自然的契機ではなくして、歴史的契機を指示してゐる。併しこゝでも我々は、運命の共同が直ちに民族を限定するのではなくして、反對に一つの民族である故に一つの運命を共同にす

るのであると云はねばならぬ。

以上列記した種々の要素は民族を規定するに必要な契機と云へるが、之のみでは充分なる解答を與へる事は出来ない。我々は更に日常的、文化的側面から民族を考察してみたい。民族と云ふ人間集團即ち民族集團は生のあらゆる領域に於て、外に對しては特殊なる文化を、内に共通する集團であると規定すべきである。そしてこの特殊なる文化があらゆる領域に亘つて成立し、更に共通になるには通常長い年月を必要とし、長い年月を経る文化は傳統的文化である故に民族はあらゆる領域における特殊傳統文化を共同にする人間の集團と云ふ事が出来るであらう。

かゝる立場から上述の共屬の意識及び意欲を共同にする人間の集團なる結合体と云ふ主觀説の立場の考察するに、こゝではこの共屬を意識し意欲するものは、一体何人なりやの反問がおこるであらうし、又文化的共同体を基礎とせざる共屬は決して民族的共屬とは考へられない。例へば特殊的文化領域、即ち宗教の領域において特定宗教上の教義を共通にする人々が共屬を意識し、又意欲してもそれは同一宗教を奉じ又同一宗教に屬するものとしての共屬にすぎず、彼等の間において文化的特殊性の共同がなければ、こゝには異民族としての宗教的共屬が見られるのみである。又上述の運命の共同体を基本として生じた共屬の意識も、運命を共同にする人間が文化共同体を形成し得ざる限り、それは異民族の共同にすぎない。而して民族の主觀的結合が時には一時的の昂奮や感情にはしる場合も想像すれば尙更その根底にはあくまで傳統的文化共同体を有しておらねばならぬ。更に民族的文化は傳統的文化であり、父祖傳來の文化である故に、又その文化共同体は必ず一定の地域において成立し、その土地と結合してゐなければならぬ。さきあげた地緣的共同体の想起される所以もこゝにある。更に又血緣共同体の強調する人種と民族との同一視も實は血を等しくする事は場所を共にし、文化を等しくする事の頗る有力なる一因をなす爲に、文化の共同する所には必ず血の共同があると考へるところにある。同祖同血の信仰は民族の主觀的結合、即ち共屬の意識意欲を支持し強化する一の有力なる原因をなし

てゐる事は我々としても之を否定する事は出来ない。併し前に述べたごとく如何に最も純粹なる民族と稱されるものでもそれが過去においては種々の混合によりて形成されたものであり、又、同血同祖と考へられてゐる人種においても、それが幾多の民族に分化してゐる事を認めざるを得ない。以上の事實は血縁共同体説は民族形成の必要條件であるにしても、決して十分なる條件とは云へない事を証明してゐる。併し我々においても著しき體質の差異は民族の共屬の意識及び意欲を甚だしく阻害し、文化共同体の形成を阻止する事實は之を認めねばならぬ。

かくのごとく我々は民族となすは客觀的なる文化共同体であり、主觀的なる共屬の意識及び意欲はこの文化共同体（*Kulturgemeinschaft*）を基盤として成立し、又この意識及び意欲の覺醒は文化共同体のある所においてのみ存在し、尙其以外に前に述べた種々の契機が具備される事もありうるし、尙且肝要な事は自己の民族が他民族と事に高次の社會集團としての人類社會の存在を意識し、互に特殊者として、自己に特有なる文化を接觸、交渉、或は反對、對立等の刺戟によりて意識した時に始めて自己の傳統的文化を反省せしめた時、始めて實質上の民族が成立すると考へられる。

次にはかくのごとく文化共同体を基底とし成立する民族の有する文化とは一体如何なるものであるかを考究せなければならぬ。例へば個人を例にとれば、人は種々の先天的生得的な精神的素質を享けると共に后天的、習得的な諸々の心的傾向をもつが、それらのものが全体として、統一的な構造をなしており、又その構造は個人により一樣ではない。その構造を我々は性格と稱しており、同時にその差異相を個性と呼ぶならば、人の性格は一方においては、實に千種萬様の個性を現出すると同時に同一社會集團に屬する者の間においては、そこに或共通な特殊の趣を生ずる。丁度之と同様或民族の文化には、その民族に内においては或共通な特質が認められるがそれを他民族と比較する場合には相互の間に何等かの差異が認められる。それは云ふまでもなく文化の異なる通民族的な特色を規定する諸條件が各民族により異つてゐる事に基くのである。我々は或民族の文化的構造の共通の特質を民族的文化と呼ぶのである。

然らばこの民族的文化の特色は如何にして明らかにせられるかと云へば、第一にはそれ自体直接觀察の對象となす事は不可能である故に、集團の構成員としての個人の行動や精神的所産を觀察して、その成員の屬する民族の特色を明かにして通民族的文化の特質を知る方法があるが、この方法は最も容易な又簡単な方法であるが、この行爲行動や精神的所産の中には種々雑多のものが含まれ、従つてそれ等の羅列に終りやすく、それから本質的なものを選択して民族の文化の特色に統一を賦與する事は甚だしき努力を要するものである。

従つて我々は第二の方法として民族的文化の生成發展を規定する諸條件を勘案してその特色を明かにせねばならぬ。この中我々は環境的諸條件を抽出し、更にその中自然的と文化的との二者に分化して考察する必要がある。併し前者即ち風土による民族的性格乃至文化の特色の解明は之を絶対に無視する事は出来ない。が風土の直接的なる影響は從來余りに過大視された傾向が多分にあり、我々はこの方法にのみよる場合にはそこに或種の危険性を感ずる。

それ故に我々は環境的條件の中、文化的なる種々の事象を抽出してそれが民族的文化の特色を規定する事實を考察する方がより容易にして確實であらう。

さてこの文化的環境は前に述べた自然的環境以外のすべてを總稱するとすれば甚だしく多方面に涉るのであるが、我々はこの種々の文化的環境のうち最も重要であり、最も有力な要素をなしてゐる或特定民族の社會的環境即ち民族社會の文化的特殊性を指摘して、更に我々の課題であるこの社會的基底が宗教を如何に規定するかの問題に進み度い。

我々はまづ最初に東洋民族の社會を選びこの中でも支那民族の社會が彼等の特殊の宗教を如何に規定するかを述べるであらう。

支那社會の基底は農村的定住生活にある。支那の有する肥沃な原野と夏季の多雨などによる農業に好適した風土氣候は古來より既に農業を主とし牧畜を従とした經濟段階に入らしめ、爾來益々農業が發達し歷朝統治者は極端な農業第一

主義をもつて今日にいたり、現在支那人の約八十%は農民であると云はれてゐる。支那の農業のうち畑作を主とする北支にありても治水灌漑の必要とされる事は古來の歴史に照しても明らかであり、特に荒野の開拓から良好の耕作地となすまでの多大の勞苦と資本を注入せねばならぬ等の理由から農民の極度の定住性が自然に生ずる。かゝる事實は水田農業を主とする中南支に於ては一層強き傾向を有す。即ち定住的家族生活を促進する農業のうちでも、水田耕作農業が最も高度の定住的家族を形成する。何となれば水稻農業では比較的僅少の土地を以て、割合に多くの人口を扶養し得る故に、小地域の上に自給自足的經濟を營む事が可能であり、又他方には水田經營のための水利施設には多數の人々の協力共營を必要とする故に地域的な部落共同生活を生ずる事が自然的であり、従つてその結果余程の事情の存せない限り離村が比較的僅少となるであらう。更に水田はその開墾から美田たらしむるまでには父祖傳來長い年月に亘りその努力が繼續されねばならぬ。又水田耕作は他の農作に比較してより緻密な技術を必要とし且播種より收穫にいたり、更に貯藏に至るまでの丸一年間は常に細密周到な注意を拂はなければならず、又耕作上天候氣象に左右される面も他の農作に比して多い故に、自然耕作上に宗教性を賦與する場合が多い。(宇野田空著「マライシヤに於ける稻米儀禮」p. 80) 故にこの耕作技術に關する傳承を体得する長老を尊敬する風習が濃厚となり、又水田を媒介として、父子の心が結ばれる即ち家族的紐帶を強化するのである。

更に支那の農民の居住家屋は一定の區劃を以つて密集してゐる点をあげねばならぬ。大体農民の住屋家屋は耕地と近接するを便となす故に、通常は散居を理想となすが支那にありては特に、屢々異民族、他部族の侵入迫害を蒙り且治安維持に中央政府の権力の庇護を受ける事の不可能の爲に廣漠たる平野に人爲的に設立した一定區劃の中に部落を作り共同防衛を完ふせんとした傾向が顯著である。かゝる点に關しては我國の小村落が山川の自然的境界によつて區分された小地域上に存在するのと大いに異つてゐる。かゝる村落の中に高度の定住生活を營む上に交通機關の極度の未發達の

爲、支那村落は自然外部との封鎖性を大にし、自ら血統上の融合が生じ、一地域は殆んど一血族のものゝみで占められ、同族村落が支那殊に中平支方面に多いと云はれる理由の一つもこゝにある。さてかゝる血と地との共同の上に立つ小部落民の日常生活における相互接觸の頻繁性は之等の人々を互に熟知せしめ、その意味内容において略々等質的ならしめる。かゝる事實と經濟上の高度の自給自足性の行はれる事及び、道路其他の交通機關の未發達等の種々の條件が理由となつて、小部落民をして他の社會から隔離せしめ、尙一層の封鎖性を強めこゝに所謂支那社會の「地域的細分封鎖」(白井二尙、支那社會の地域的規定「東亞人文學報第一卷第二卷」)を生じ、之が支那人の生活のあらゆる領域に大なる影響を與へてゐる。

蓋し強固なる封鎖性を有する一集團内に同居居住する人々の生活からは欲望、感情、知力等の意識の等質性が生じ、進取競争、批判分析改革等の如き心的作用の代りに、長老の尊敬と傳統傳承への隨順から進んでは、無爲、無知、無欲の如きを美德とする事さへ起り、かくして下位者の上位者への禮の從順悅服の態度が自然と醸成される。

一方上位者長上者の權威威光が自然的に強調せられ、その上更に之が傳統として時間的繼續を持つ事によつて益々強大なる統制力を有し、かくして支那社會全体の構造の基底に嚴然として位階體統(Hierarchy)が確立せられる。この事は當然宗教上に於ても、長老の靈に捧ぐる具體的にして切實なる畏敬の念、或は愛慕追惜の情を昂めしめ、所謂祖先崇拜(Ancstra-worship Amenkhus)への信仰形式にまで進ましめる。

祖先崇拜とは云ふまでもなく祖先を靈的或は超人間的存在として禮拜する一種の宗教的慣習であるがその起源、發達については各異説が存するが殆んどが定住生活を營む民族の上に生起し而も最も共同社會性(Gemeinschaft)の濃厚である事を常としてゐる。畢竟農業生産を營む人々の間には何等かの形態を有する家族を含む農村部落を形成する事が必然であり、その部落内に高度の共同社會性が醸成され、批判的理性的よりも感情的、批判的に傳統に依存し易く當然長

上者の權威が尊敬される事は前に述べた如くである。更に一方には靈魂不滅説とこれに基く生者と死者との一体感が意識され長上者の死後も生前と同様尊敬崇拜が繼承され、一族一家をあげて心から之に奉仕し厚く葬り慕しく祀る事が自然的に行はれ、而して威と愛とを並びもつ長老の靈の庇護により農作、家運にも又集團全体にも福祉が與へられ、子孫はその庇護により安んじて生活する事になる。かゝる祖先崇拜的信仰形態が支那民族の風土的、或は生産形態即ち水田耕作農業生産に規定された社會の中に強く發達した事を我々として深く銘記すべきである。之を逆に云へば支那の民族はその文化共同体の中最も重要な契機としての社會によつてその民族性を規定され、それがひいては世界諸宗教中最も特異な、又時としては歐米人からは一種の畸形的重荷 (Levy-Bruhl: *La mentalite primitive* 山田吉鷹譯) レヴィーブルール未開社會の思惟 (P. 327) と酷評されてゐる支那獨特の祖先崇拜的宗教を規定してゐるのである。

一方翻つて支那民族と文化的人種的に密接なる連関性を有する我國の民族とその宗教との關係を省みる必要に迫られてゐるが紙數の制限の爲にこの機會に解明されざるを遺憾とするが最後に一言すべきは西歐社會にありてもギリシヤ、ローマに濃厚なりし (Herbert Spencer *Principles of Sociology* Vol. P. 1. 295-297) この祖先崇拜的習慣が、現代はその進化せる文化の中心から取殘されたる遺物的なるものとして、萎縮せる形態に於てのみ殘存する事實は西歐社會の基底が近世以降急速の變化を來し移動性多き利益、社會的都市的生活がその基底を形成するに至れる事に原因し、更にキリスト教的一神論の鮮明なる教義が、かゝる遺風を拂拭せしによるのである。我々が醇風美俗とせしかゝる信仰形態が、西歐と同様、或はそれ以上急速に、誠に著しき社會的變革と共にその慣習を變化せめしねばならぬであらうことを、想像せねばならぬ。過去において外來宗教しての佛敎が我國民族の宗教であつた祖先崇拜をその中に同化融合、或は助長せしめた事實が將來も同様に生起するか否やは、大いに疑問とせざるを得ない。況して上述せしごとく明白なる一神敎的立場にあるキリスト敎との接觸は、好むと好まざるに拘らず我民族としては避け得ないと云ふ事實はより一層我々の關心を拂ふべき課題である。尙同時に社會的基底の急速なる政治的經濟的變革は右の事實の最も有力なる推進力となるであらう。